

《詩篇 110 篇》

0 ダビデの賛歌

《祭司的王》

- 1 主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」
- 2 主は、あなたの力強い杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵の真ん中で治めよ。」
- 3 あなたの民は、あなたの戦いの日に、聖なる飾り物を着けて、夜明け前から喜んで仕える。あなたの若者は、あなたにとっては、朝露のようだ。
- 4 主は誓い、そしてみこころを変えない。「あなたは、メルキゼデクの例にならい、とこしえに祭司である。」

《諸国の審判》

- 5 あなたの右にいます主は御怒りの日に、王たちを打ち砕かれる。
- 6 主は国々の間をさばき、それらをしかばねで満たし、広い国を治めるかしらを打ち砕かれる。
- 7 主は道のほとりの流れから水を飲まれよう。それゆえ、その頭を高く上げられる。

本篇は有名なメシヤ詩篇であり、主イエスご自身もいくつかの箇所でも引用しておられます。例えば、

イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、『主は私の主に言われた。「わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。」』と言っているのですか。ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう。」（マタイ 22:43-45／マルコ 12:36-37、ルカ 20:42-44も参照）

ここで主イエスは、詩篇110篇で語られている「主」が、実はご自分を指して言われていたのだということをお聴衆に示しておられます。新約聖書が旧約聖書を解釈しているのですが、まずはそれに先立って詩篇そのものが伝えていることを探っていく必要があります。

本篇が書かれた時期は、内容から見て、ダビデ・ソロモン時代であろうと考えられています。この頃、宮廷に仕える預言者がいて、王の即位式にあたって祝福の詩が詠われたようです。

本篇は二部構成となっており、以下のように分けることができます。

- ① 祭司的王（1～4節）
- ② 諸国の審判（5～7節）

① 祭司的王（1～4節）

1節冒頭に出てくる「私の主」が誰を指すのかが読者を悩ませるところです。関係性として、おそらく、「私」は詩人（宮廷預言者）を、「主」は王を指しているのでしょう。そして、王に向かって語りかけている「主」とは神です。

このとき即位したイスラエルの王は、第一に戦いに長けた王として描かれています。「敵を…足台とする」という表現は「完全な征服」を意味し、絵画的にも古代の王の足台には、打ち負かした敵の姿が描かれていたようです。「右」とは「力」「権力」を表し、神の強い御手によって守られていることを意味します。2節の「シオン」は「エルサレム」の別称で、取り囲む敵を治める中心地になるというイメージです。3節では、イスラエルの志願兵が聖戦に向けて身支度している様子が描かれていますが、その若者たちによって構成された壮麗な軍隊を誇らしく眺めている王の姿が目には浮かびます。

ところで、4節では一転、この「戦いに長けた王」のことを「祭司」と呼び始めます。祭司とは、神の御前に人をとりなす役割を担う役職ですが、この宗教的な側面を王が担うのです。イスラエルの王が祭司を兼任することは理想とされていました。引き合いに出されている「メルキゼデク」は、創世記14章に登場したサレムの王かつ祭司です。ヘブル書ではこの人物が神の系図から出た人と解釈されています（ヘブル5:5-10、6:19-7:28）、その所以は彼が二つの職務を一人で担っていたところにあるでしょう。ここに、イスラエルの王の理想像——神との関わりにおいて、戦いに長け、民をとりなすべき存在——が表されました。

② 諸国の審判（5～7節）

5節冒頭に出てくる「あなた」は、詩人が王に対して呼びかけていることばでしょう。「主」は王の右にあって守り、敵を打ち砕かれると。「御怒りの日」ということばは「最後の審判」を思わせますが、ここではひとまず目の前の戦いにおいて共に出陣される主の助けについて言われていると思われます。とはいえ、この詩が様々な時代に詠まれるとき、その時々敵に対する神の勝利が語られていることとなります。エジプト、アッシリヤ、バビロン、メディア、ペルシャ、シリア、ギリシャ、ローマという聖書時代の大国の数々が思い起こされます。キリスト論的に読むならば、サタンに対する主イエスの勝利が物語られているとも言えるでしょう。そして、その戦いは終末的な「最後の戦い」を経て、世の終わりの「最後の審判」と結びついていくのです。

7節では、「主は道のほとりの流れから水を飲まれよう。それゆえ、その頭を高く上げられる」という美しい表現が出てきますが、これは主の守りによって戦いに勝利した王と軍隊が、その地で水を飲んでいる様子を描いています。水を飲むという行為は「戦いへの勝利」を象徴していたようです。戦い抜いた一同の晴れやかな顔が思い浮かびます。

さて、以上のように詩篇そのものを理解した上で、キリスト者の霊的戦いに結びつけていくことができそうです。私たちは主の兵士であり、主イエスを将軍としてサタンの軍勢と戦う者たちです。

腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。（エペソ6:14～17）

これら「光の武具」を身に付けて日々出陣します。朝のディボーションの重要性を忘れないようにしましょう。キリストの三職務が「預言者」「祭司」「王」であるならば、本篇で語られていた王の究極の姿は主イエスの内に見出されます。そして、この方に追随する者もまた、この職務の一旦を担って世に出ていくのです。勝利者であられるキリストは、既に敵を足台としておられます。この力強い助け主と共に霊的な戦いに勝ち抜いていきたいと思えます。